

匂宮、浮舟の家に夫になりすまして侵入（源氏物語・浮舟）

薰^{かむね}と匂宮^{におののみや}は男女^{おんなのこ}達である。（相手の真似^{まね}くらいはできるであろう。）匂宮の妻^{かみ}の中君^{なかのみぎみ}は、離れ離れになつていた妹^{いもうと}、浮舟^{うきふね}を苦境^{くるけい}から救うため居候^{いこう}させた。ある日匂宮は、妻が洗髪^{せんぱつ}の際^{とき}に奥の部屋^{おくのむま}にいた浮舟^{うきふね}を見つけ強引^{きやういん}に添い臥^{そねね}したが、乳母^{ちちのぼ}や召使^{めいし}いの女房^{にようぼう}右近^{みぎのちか}で浮舟^{うきふね}を守つた。好色^{こうしき}な匂宮^{におのみや}に対して、真面目^{まじめ}で信望^{しんぼう}がある薰^{かむね}が浮舟^{うきふね}を宇治^{うぢ}にかくまうことになる。その後薰^{かむね}は浮舟^{うきふね}を妻にしたが、仕事^{しごと}が忙しく宇治^{うぢ}までなかなか行けない。匂宮^{におのみや}には皆で居場所^{いばしよ}を隠^{かく}していたが、ある日、手紙^{てがみ}を見て露見^{ろけん}、匂宮^{におのみや}は確か^{たしか}めに山道^{やまみち}を馬^{うま}で宇治^{うぢ}に向かつた。匂宮^{におのみや}がその家の格子^{くし}から垣間^{かきま}見ると、確かに知つた顔^{かほ}であつた。女君^{おんなのみぎみ}（浮舟^{うきふね}）と右近^{みぎのちか}ら数人^{かずにん}の様子^{ようし}をしばし覗^{のぞ}き、夜^よ、皆^{みな}が眠^ねたそうにしばらくした時に匂宮^{におのみや}は格子^{くし}の戸^{かど}を叩^{たた}いた。

1 いととう寝^ね入りぬるけしきを見給^{みたま}ひて、また、せむやうもなければ、忍^{しの}びやかにこの格子^{くし}を叩^{たた}き給^{たま}ふ。右近^{みぎのちか}聞きつけて、「誰^{たれ}ぞ」と言^いふ。声^{こゑ}づくり給^{たま}へば、あてなるしはぶぎと聞き知りて、「殿^{との}のおはしたるにや」と思^{おも}ひて起きて出^ででたり。「まづ、これ開^{ひら}けよ」とのたまへば、「あやしう。覚えなきほどにもはべるかな。夜^よはいたう更^あけはべりぬらむものを」と言^いふ。「ものへ渡^{わた}り給^{たま}ふべかなりと、仲^な信^{のぶ}が言^いひつれば、驚^{おど}かれつるままに出^で立ちて。いとこそわりなかりつれ。まづ開^{ひら}けよ」とのたまふ声^{こゑ}、いとようまねび似^にせ給^{たま}ひて忍^{しの}びたれば、思^{おも}ひも寄^よらずかい放^{はな}つ。

「道^{みち}にて、いとわりなく恐^{おそ}ろしきことのありつれば、あやしき姿^{すがた}になりてなむ。火^ひ暗^くうなせ」とのたまへば、「あな、いみじ」とあわてまどひて、火^ひは取りやりつ。「我^{われ}、人^{ひと}に見^みすなよ。来^きたりとて人^{ひと}驚^{おど}かすな」と、いとらうらうじき御心^{ごこころ}にて、もとよりもほのかに似^にたる御声^{ごこゑ}を、ただかの御^ごけはひにまねびて入り給^{たま}ふ。「ゆゆしきことのさまとのたまひつる、いかなる御姿^{ごすがた}ならむ」といとほしくて、我^{われ}も隠^{かく}ろへて見たてまつる。

いと細^こやかになよなよと装束^{まつぷら}きて、香^{かぐ}の香^{かぐ}うばしきことも劣^せらず。近^{ちか}う寄りて、御衣^{ごえ}ども脱^ぬぎ馴^なれ顔^{かほ}にうち臥^ふし給^{たま}へれば、「例^{れい}の御座^{ござ}にこそ」など言^いへど、ものものたまはず。御衾^{ごきん}参^まりて、寝^ねつる人^{ひと}びと起^たこして少し退^ひきて皆寝^{みな}ぬ。

御供^{ごこう}の人^{ひと}など、例^{れい}のここには知らぬならひにて、「あはれる夜の^よのおはしましきまかな」「かかる御ありさまを、御覧^{ごらん}じ知らぬよ」など、さかしらがる人もあれど、「あなかま、給^{たま}へ。夜声^{よこゑ}は、ささめくしもぞかしかましき」など言^いひつつ寝^ねぬ。

10 女君^{おんなのみぎみ}は、「あらぬ人^{ひと}なりけり」と思^{おも}ふに、あさましういみじけれど、声^{こゑ}をだにせさせ給^{たま}はず。いとつつましかりし所^{ところ}にてだに、わりなかりし御心^{ごこころ}なれば、ひたぶるにあさまし。初^{はつ}めよりあらぬ人と知りたらば、いかがいふかひもあるべきを、夢^{ゆめ}の心地^{こころ}するに、やうやう、その折^せのつらかりし年月^{としげふ}ごろ思^{おも}ひわたるさまのたまふに、この宮^{みや}と知りぬ。いよいよ恥^ちづかしく、かの上の御^ごことなど思^{おも}ふに、またたけきことなければ、限^{かぎ}りなう泣^なく。宮^{みや}も、なかなかにて、たはやすく逢^あひ見^みざら

1 傍線は読解に役立つ重要語・数字は読解で意識するポイント。

2 以下、敬語が使われているかどうかによって人物特定ができる典型的な例。

3 殿とは誰のことか。また、この段のように女房^{にようぼう}対^{たい}殿上人^{とのうじん}のように身分差^{ぶんぶんさ}のあるやりとりでは敬語^{けいご}によって誰^{たれ}が主体^{しゅたい}かがわかりやすい。

4 右近^{みぎのちか}のセリフ、通い婚^{とおいこん}でも急な訪問^{ほうもん}は不審^{ふしん}である。

5 匂宮^{におのみや}は先程^{さきほど}より話を立ち聞き^{たちき}しており、浮舟^{うきふね}たちが「ものへ渡る（どこかに行く）」らしいと仲信^{なかつぶ}から聞いたと偽^{いつはり}つたのである。

6 思いもよらずとは何を思いよらなかつたのか。

7 「かき放す」は重要単語^{じゆうようたんご}でもないが、何のことか。掛^かけると放^{はな}すで想像^{さうぞう}がつく。

8 道中^{みちのちゆう}で「恐^{おそ}ろしきこと」とがあったとはい

え、火^ひを消^けさせる理由^{りゆう}に平安^{へいあん}の感じ^{かんじ}がたが見^みられるようだ。男^{おとこ}でも化粧^{けしょう}をしていた時代^{じだい}である。

9 かの気配^{きはい}とは何か

11 敬語^{けいご}のあるこの主体^{しゅたい}は誰^{たれ}か。

12 かつての匂宮^{におのみや}を思い出^{おも}しているのだから、「以前^{いぜん}情熱^{じやうねつ}的に迫^{せま}つてきたが、いまその人^{ひと}だとわかつた」と続くこのあたりの文脈^{ぶんまく}は難しいといえる。

むことなどを思すに、泣き給ふ。

夜はただ明けに明く。御供の人来て声づくる。右近聞きて参れり。出で給はむ心地もなく、飽かずあはれなるに、またおはしまさむことも難ければ、「京には求め騒がるとも、今日ばかりはかくてあらむ。何事も生ける限りのためこそあれ」。

13 この主体はだれか。
この前後は浮舟の心中。

14 「かの上」とは匂宮の妻である中君のことと、浮舟は中君に世話にもなっていた。またこの事情で匂宮は浮舟と知り合った。